

# 泉 いずみ

―目次―

表紙 「わたぐも」病室から撮影

令和6年度報恩講案内

無事生還しました

雑巾物語

原発避難

「ふるさと」とは何だろうか？

新連載「それでも人生には意味がある③」

掲示板・お知らせなど

\*付録 ハザードだより

ほのぼのカレンダー

野呂美道

野呂美道

野呂美道

野呂美道

野呂美道

野呂美道

野呂美道

勝田茅生



空遊ぶ 羊となりて 秋の雲 野呂博子

今月号の百折不撓はお休みします。申し訳ございません。  
変わりとして、今年度の報恩講のご案内を掲載いたします。是非お参りください。



住職

東岳山

安泉寺

# 報恩講

日程

令和六年

12月7日 土

14:30

お建夜のお勤め

12月8日 日

6:00

晨朝のお勤め

10:00

満日中法要

法話2席

12:00

お齋

真宗大谷派の報恩講（ほうおんこう）は、親鸞聖人の教えに触れ、そのご恩に報いる場として、広く信徒の皆さんが集まりお勤めをする大切な法要です。報恩講では、親鸞聖人が生涯を通じて示された仏法の道を今一度思い返し、感謝と報恩の心を新たにする機会となります。

### 講師紹介



北村雄平 師（浄流寺住職）

岐阜県の岐阜県の郡上八幡にある真宗大谷派浄流寺住職。  
在家より僧籍を得て、家族で郡上市の古刹に入寺。現在、岐阜県の多治見市に支院を設けるべく奮闘中。

〒49610945  
愛知県愛西市三和町中ノ割173  
電話…056712810001

WEB: <https://www.tougakuzan-anseni.com/>  
MAIL: [dai5noro@gmail.com](mailto:dai5noro@gmail.com)



◆10月7日、私は胃癌を摘出する手術を受けた。ステージ1の早期だったので、内視鏡で処理をする手術だった。◆途中で麻酔が切れ、術中のすべてが分かった。足が猛烈に痛くなり、動かすと押さえつけられた。喋ろうにも口は内視鏡で塞がれている。もうすぐ、もうすぐと祈るような気持ちで手術が終わるのを待った。◆7時間もかけて手術は成功した。翌日の内視鏡検査で、胃の患部は出血もなく、順調に回復に向かいそうだった。4人部屋は患者さんとはカーテンで仕切られ、顔を合わせることもほとんどなく、プライバシーは良く守られている。◆しかし毎日来る主治医の声はひととき大きく、誰がどんな病気でどういう状況なのかはカーテン越しに筒抜けだ。私は最も軽い症状に属すると思った。◆病院では時間が果てしなくある。読書やテレビを見る時間もたっぷりある。午後からは妻や友人や兄弟が見舞いに来た。妻は着替えやもろもろの事をやってくれるのでありがたかった。◆5階の東向きの窓から外の景色が良く見渡せる。見事な朝焼けや、表紙にあるようなわた雲、あるいは夜の町やお祭りの神輿などなど被写体には事欠かない。私は写真が趣味などで、時間を決めて撮影に没頭した。おかげで、ささやかな個展が開けるほど撮影を満喫した。◆「親鸞」の本を三巻まで読んだ。その中で、特に印象に残っているのが、七高僧の源信僧都の母の短歌だ。これは今月の言葉として8頁で解説したので一読してください。◆またEテレで放映した、永原さんという助産婦さんの話に感動した。彼女

は神戸で「赤ちゃんポスト」と「いのちのドア」を開設し、大勢の母子を救った。その根底にある一つの詩を紹介する。

旅人が人生を歩むときに、いつももう一人共に歩いてくれる方がいた。イエスである。砂浜にはいつも二つの足跡があった。ところが、彼が最も辛い時、その足跡は一つしかなかった。あとで、旅人はイエスに聞いた。「なぜ、あの時、私と一緒に歩いて下さらなかったのですか。」するとイエスはこう答えた。「いとすよ、私は○○○○○○○○いたのだよ。」

◆○に入る言葉を考えてください。答えは8頁に。入院は私にとっては、日常から少し離れて人生を見つめなおす絶好の機会となった。貴重な体験を今後の生き方に生かしたい。皆さん、ありがとうございました。



◆私たちが参加している「でらボラ名古屋」の活動を紹介する。東日本大震災以来結成された、真宗大谷派名古屋教区のボランティア団体で、被災地への様々な支援を行っている。誰もがいつでも参加自由だ。◆私たち安泉寺ハザード会もこの団体から絶大な支援をいただいた。◆東北へ生徒と研修を行なう時も旅費を補助していただいた。◆どれほど助かったか。そして、その資金源が、毎月の別院開祖の命日に行われる募金活動であることを知った。◆ずっとそれに携わっておられた八木さん（故人）はいつもおっしゃっていた。「募金に立つ僧侶が少ない。僧侶の姿をした人間がいるとこないのでは、信頼度がまったく違う。」

◆この言葉は私の脳を一撃した。貰うだけもらって、募金は人任せ、被災地支援など目立つことに僧侶は動くが、原点の募金には顔を見せない。痛烈な批判である。◆この一言で、私は僧侶として時間が許す限り、募金活動を継続することを決めた。いつも募金だけに協力するお母さんたちがいる。被災地には行けないが、せめて募金で支援したいと、休まずに駆け付けける。◆八木さんと同じく、僧侶の参加が少ないことを批判しておられる。◆さて、そのさなか、能登では豪雨による二重の災害が起きてしまった。仮設住宅さえもが浸水し、二度も避難を余儀なくさせられてしまう被災者も出てきた。◆その時だ。でらボラ名古屋のラインに「雑巾を集めています。」というメッセージが

届いた。とてもタイムリーな呼びかけだ。水害の事後処理で、一番役に立つのが雑巾だ。ほかにも幅広い用途がある。私は風呂場にある多くのタオルを持ち出して来て妻に事情を話し「雑巾を縫って！」と頼んだ。妻はすぐにミシンを持ってきて何と30枚の雑巾を瞬間に縫ってしまった！◆以前、コロナの時、妻は家にある布を使って、何百枚もマスクを作った。近所の主婦も参加してマスク工房のような仕事をした。ゴムもなかったので、パンストを輪切りにして代用した。◆その原動力は、被災地に足を運んだことだ。被災者の気持ちに分かるからこそその行動だと、妻に感謝した。◆能登の豪雨の後、私も悶々としていた。何かできることはないかと。無理をせず、今ここで出来る支援を呼びかけてくれた「でらボラ」の呼びかけに参加できることを嬉しく思う。



◆9月下旬、妻と見た映画「決断」。2011年3月11日、東日本大震災後、爆発した福島第一原発の事故を受けて、全国に自主避難した家族の話だ。◆何組かの母子が故郷を離れて北海道から沖縄まで、中には着の身着のまま避難した人たちもいた。そして、そのまま各地に定住した家族も多い。原発避難は共通する悲劇として、多くの夫婦の離婚を招いた。夫が家族を養うために、福島に残って、仕送りをする場合が多い。◆しかし、そうではなく、子供を守る妻と夫の見解の違いから、分かれてしまうケースもある。いずれにしても、原発事故が起こらなかつたら、家族は幸せに暮らしていたはずだ。国や東電の功罪は甚大である。◆ドキュメンタリーでは、移住して活躍する母親の姿をとらえたものが多かった。全国各地で、原発事故で移住した母親が、その地の議員として当選した映像を紹介していた。また、原発訴訟で、国や東電を訴える原告として運動する姿も紹介されていた。◆見終わった後で、妻が言った。「自主避難するのも決断だけど、避難せず、福島で生きようとするのも決断だわね。そういう人たちの意見も取り上げてほしかったわ。」◆なるほど、私は「決断」という勇敢な言葉の中には、そういう意味もあることに気付かされた。「福島に留まる」ことも大変な決断ではないか。◆震災以来、名古屋教区は福島

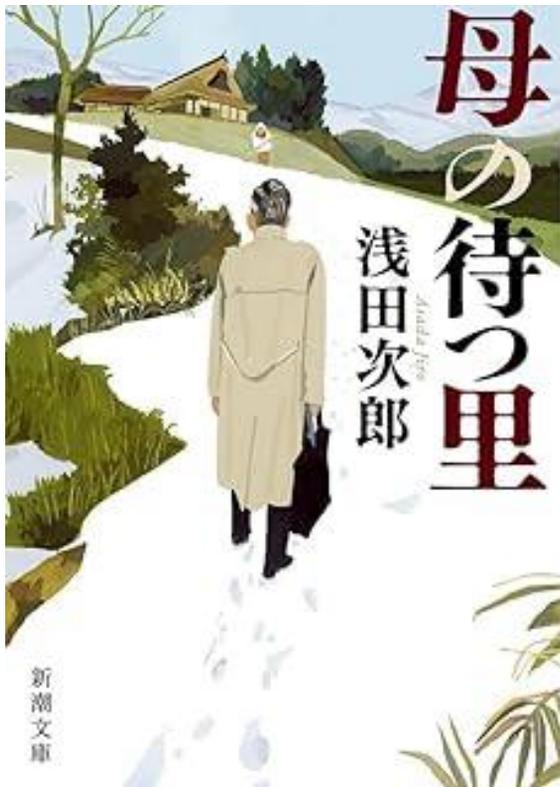
の母子を保養する事業を行ない、それは今も続いている。安泉寺にもホームステイに来ていただいた母子がいる。◆それを巡っては様々な意見が起き、軋轢もあったという。「なぜ、避難しなかつたの?」「なぜ故郷を捨てたの?」……避難先や、福島各地でも、非難の応酬があった。出身を隠して移住した家族もある。避難先での差別もあった。◆保養に名古屋に来る時でさえ、「あなたは旅行ができていいわね。」と言われ、内緒で来た家族もあるという。そのような、世間の偏見や圧力を抱えながらも、子供を守るために母親が取った行動を、私たちはこれが正しいとか、これは間違っているとか決めつけることは絶対にできない。◆さまざまな事情を理解し、私たちに今でも何ができないかを考え続けなければ、彼らに寄り添うことにはならないのではないかと痛感した。我が家に来た福島の母子を、私たちは一生見守り、ともに生きていく覚悟を新たにしたい。



映画「決断」  
監督・撮影：安孫子亘  
配給：ミニフィルム

◆テレビを見てみると、田舎を舞台にした番組がとても多い。「小さな旅」「いい移住」「人生の楽園」「はやぶさ消防団」「新日本風土記」……などその多彩さに驚く。◆大抵は田舎生活の素晴らしさをアピールする番組が多い。私はかんぐるのだが、少子化や、大都市集中化を憂慮した、何かの力が働いているのではと思ってしまう。◆本当に田舎が良いところならば、人口減少もないだろうし、全国の人口がバランスよく均衡を保っているだろう。◆田舎で育った若者がなぜ都会へ出て行ってしまふのか、その対策を政府は怠っていないか？ 暮らしやすく雇用もあり、老後も安心な田舎暮らしは絵に描いた餅か？ そんなことを私は田舎で暮らしながら考えている。◆先日「母が待つ里」というドラマを視た。テーマパークのような田舎に一泊50万円で泊り、疑似母の手料理や、地域の人々のもてなしを受けるといふ不思議なドラマだ。住民も泊まる本人の前でぎこちない演技をする。「なっちゃん、久しぶりだねえ。ゆっくりしてきんさい。」でも、最後にはどの客もそこが本当の自分のふるさとと感じてしまう。◆仕事に埋没して、家庭も持てない大会社の社長、介護と医療で疲労しきった女医、退職したとたん、妻に離婚されてしまった夫など、いずれも都会の生活に心身疲れ切った大人たちを、このパークは本当のふるさとのように温かく迎え入れてくれる。◆老母役の宮本信子の演技には舌を巻いた。おそらく遠野地方であろうその方言は完璧

で、以前、東北出身の俳優、長岡輝子や、往年の名優、北林谷栄を彷彿とさせるものがあつた。◆いまや、お金を出してまで田舎を体験しなければ心の平安が得られなくなったのかと、私は複雑な気持ちになった。しかし同時に、私も自分のふるさとその他に全国各地に、心のふるさとを沢山持っていることに気がついた。◆木曾路の旅籠「まるや」、飛騨の「旅館高山」、被災地の女川「竹の浦」、仙台の「海楽寺」、神戸の「しあわせなふくろう」、二本松の「真行寺」と「水田家」、広島の「柱島」と「端島」などそれぞれはそれは沢山ある。◆そこを訪ねると懐かしい人たちがドラマのように私たちを待っていてくれるのだ。再会するたび、気持ちほぐれ、ほっとする。◆心の中にふるさとを持つ人はさいわいである。



母の待つ里  
著者 浅田次郎  
新潮文庫

第1章「日曜生まれの子」その光と影

◎両親の性格を受け継いで

◆病気の人や、苦しみ悲しんでいる人に対して、フランクルは常に助けになろうと力を尽くしました。この人一倍強い憐みの気持ちは、優しい母親から受け継いだのだらうと考えられます。◆このロゴセラピーの思想が、フランクルが両親から受け継いだ性格から生まれたことは、彼の伝記からも明らかです。ロゴセラピーのことを「強制収容所の体験から生まれた」という人がいますが、それは誤解です。フランクルは強制収容所で、自分の苦悩を通してロゴセラピーの正しさを確認したのです。

◎「生きる意味」を考えた幼少期

フランクルは小学校に入る前に、母親に「生きることは何の意味があるの？」と質問したそうです。「生きる意味」というと、大それた話のようですが。ロゴセラピーにおける「意味」は、今、自分の置かれている状況で求められている課題や役割のことも指します。そのとき、それをすることが、「普遍的に意味があるもの」でなければ、意味ある行動とは呼べません。◆たとえば、オウム真理教による「地下鉄サリン事件」は、彼らにとって

は「意味ある行動」だったのかもしれませんが、それは主観的な「意味」であって、客観的に見れば罪のない人を犠牲にした非人道的な行動です。このように、社会全体から見て人道的に意味があると思えない行動は、ロゴセラピーにおける「意味」ではないのです。

◎ユダヤ教徒として生きる

1918年、13才になるフランクルにとって、大切なことがありました。ユダヤ教の「バル・ミツバ」という儀式です。この儀式によって少年はユダヤ教徒の一員として共同体に加えられ、戒律を守ることが課せられます。フランクルは人生の最晩年まで、毎日祈禱を行っていたそうです。彼がユダヤ教の敬虔な信者であることは明白な事実です。◆しかし、その当時、オーストリアでは「反ユダヤ民族」の機運が高まっていました。ドイツにはまだナチ党は存在しておらず、アドルフ・ヒトラーは敗戦に打ちひしがれる一人の兵士にすぎませんでした。つまり、ユダヤ人に対する迫害はヒトラーに始まったわけではないのです。（続く）

